

#### 4 銀河鉄道の夜

(テクスト原文…宮沢賢治 作曲…信長貴富)

##### 宮沢賢治について

##### ㊦ 一 宮沢賢治について

宮沢賢治は特に合唱曲としてたくさんの詩がとられている。例えば、過去に柏葉選曲にも上がった「春と修羅」、また小曲集、「心象スケッチ」男声合唱で宮沢賢治といえ「永訣の朝」など、本当に数えきれないほどの名曲が残っている。賢治の世界観は天才だといわれることもあるが、不思議な想像の世界に生きていたことは確かである。そんな彼の人生を紡ぎ出したのはその環境なのかもしれない。

1899年、宮沢賢治は岩手県鍛冶町に生まれた。彼は幼いころに地震にあつたり、赤痢にかかつて重症になったりと色々な困難も経験していたが、勉強はできるほうで小学校の成績は常に優秀であつた。小さいころから自然が大好きで、鉱物採集や昆虫の標本づくりに明け暮れたという。また、浄土真宗の父親が開講していた講習にも参加していた。父親の信教は後に賢治の人生の大きな転機の原因となる。ただ、この頃から、厳しい風土のなかで自分が裕福な家に生まれていることに対して負い目を感じていたといい、人へもおもいやりにかけることがなかった。水のいっぱいに満ちた茶碗を持たされて廊下に立たされているいたずらっ子がかわいそうになつてその水を飲んであげたエピソードは非常に有名であるこのころから賢治の発想の素地が養われていたことがうかがえる。1909年、賢治は盛岡第一中学校に入学する。

寄宿舎に入寮して生活をした。この時期も鉱物採集や星座観察、岩石標本に熱中していたという。石川啄木の影響も受けこの時期に詩歌の作成にも着手する。盛岡中学校卒業後にはチフスでの入院をし、賢治自身父親に迷惑をかけることに罪悪感を得ていた。賢治は驚くべきほど父親に対しては忠誠の精神で向き合っていたとのことである。卒業後は親の運営していた質屋・古着屋の店番などにつききりであつたが、そもそもそのような商業にあまり興味がなく、しかもその労働が単純労働であり賢治は鬱屈になつてしまふ。そんな賢治に両親は高校進学を勧め、賢治は盛岡高等農林学校に入学する。賢治は昔からの自然科学への興味が相まって非常に優秀な成績を残し、卒業。その後は研究員として残留する。おりしもこのころから賢治は法華経を慕うようになり、読経をするようになっていた。法華経は浄土真宗とは根本的に異なる教えも多々あり、賢治はこの頃から父への忠孝は忘れずとも、己との宗教観の違いをはつきりと認識するまでになつていた。そもそも賢治の一生の生

活を見るに、彼はいわゆる童貞として一生を終え、女性にも全く興味を示さなかったことからして、浄土教の腐敗墮落した性的人間関係に絶望

していたために浄土教から乖離した節は強く肯定されている。賢治は幼いころに暁鳥敏という浄土教の僧侶の世話を任されたが、この僧は眼が見えなくなっただけから女好きがやめられないほどの俗物であり、賢治の肌には合わなかったという話が残っているほどだ。また、この時代、内村鑑三などの識者が、「法華経を確信して生命の力を謳歌し、そこに国粹主義とアジア主義と世界主義とを紙して台頭した日蓮主義運動」に賛同した一連の流れがあったという。中には井上日招のようにテロリズムに走ったものもいたが、賢治は穏健な信者としてこの思想を受け入れていたこともその信仰の一因であるといわれている。さて、研究員として残留していた賢治だったが、体調の衰えか、山歩きを禁止されてしまう。折しもそのころに上京していた妹のトシが病気になるてしまい、母親と看病のために東京に上京することになる。上京中は図書館に通いつめ、自分の将来について考えていたという。そのうちトシの体調も回復し、賢治はまたつまらない質屋の業務を岩手でこなすことになる。このころから賢治は父親と信教について、静かに、かつ激しくたくようになり、ついにある日、何気ない瞬間にコトンと法華経の本が落ちたときに、家出を衝動的に思いつき、そのまま上京してしまった。上京してから家出したとは思えないような頻度で父とは交信をつづけた。法華経では忠孝を重んじる教育を基としているため、賢治は親への尊敬を忘れなかったのだ。このままの生活を続けるのかと思えば、トシがまた病気になる、花巻に帰還することになる。その後は岩手県の現花巻農学校の教師になって生徒を教えた。金に感してはかなりルーズだったが、病気の友には高額のお金を送ったという。

そんな中、1922年、最愛のトシが死亡してしまう。このとき賢治はたくさん詩を書いていてその中には有名なものも多数残っている。永訣の朝、松の針が有名である。

永訣の朝 宮沢賢治

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもつとよ  
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゅとてちてけんじゃ)

うすあかくいつさう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゅとてちてけんじゃ)

青いうのついた

これらふたつのかけの陶碗に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつぽうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゅとてちてけんじゃ)

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになって

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまっすぐにすすんでいくから

(あめゆじゅとてちてけんじゃ)

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

ふたきれのみかげせきぎいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあふなくたち

雪と水とのまっしろな二相形をたち  
すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいこのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだってきたあひだ

みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも

あんまりどこもまっしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそらから

このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまここからいのる

どうかこれが天上のアイスクリームになつて

おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

この後半年の間、賢治は詩作をやめてしまった。あまりに妹の死がショックだったの  
だろう。

その後賢治は田んぼでほとんど趣味として農業をして暮らす生活を始めた。この生  
活を始めてから賢治はかの有名な心象スケッチと春と修羅を刊行する。心象スケッ

チという言葉聞いて、何かと思われる人も多いだろうが、これは賢治特有のものの考え方である。賢治は春と修羅を刊行した後友人にあてた手紙に、「春と修羅などとは到底詩ではない。これからあの詩は完成させるものである。このようなものはある心理学的な仕事の仕度に、正当な勉強の許されない限り境遇の許す限り、機会のあるたび毎にいろいろな条件の下で書き取って置く、ほんの粗硬な心象スケッチでしかありません。」という内容を書いていた」

とがあつた。彼にとって心象スケッチとは人の心を移すものではなく、宇宙や無限の時間につながるものなのである。個人的なものではなく、普遍的なものについてスケッチすることだと賢治は考えていたのだ。彼は一人称について、僕、俺、わたしなど何種類も持っていて、自分のことを存在ではなく現象というふうにとらえた。彼は現象としての自分をとらえることは普通の心象スケッチについて考えることだという信念を持っていた。そして彼にとってこの芸術というベクトルは、次元目のベクトルであるのだ。芸術というベクトルをもって生活していれば、どのような時代にも、どのような人の間にも生きていける、という。

特殊な考え方であるがために、この件に関しては今も色々なところで研究が重ねられている。

その後賢治は学校をやめることになる。このときに生徒に送ったのが次の詩だ。

生徒諸君に寄せる

宮沢賢治

中等学校生徒諸君

諸君はこの颯爽たる

諸君の未来圏から吹いて来る

透明な清潔な風を感じないのか

それは一つの送られた光線であり

決せられた南の風である

諸君はこの時代に強ひられ率いられて

奴隷のやうに忍従することを欲するか

今日の歴史や地史の資料からのみ論ずるならば

われらの祖先乃至はわれらに至るまで

すべての信仰や特性は

ただ誤解から生じたとさへ見へ

しかも科学はいまだに暗く  
われらに自殺と自棄のみをしか保証せぬ  
むしろ諸君よ

更にあらたな正しい時代をつくれ  
諸君よ

紺いろの地平線が膨らみ高まるときに  
諸君はその中に没することを欲するか  
じつに諸君は此の地平線に於ける

あらゆる形の山嶽でなければならぬ  
宙宇は絶えずわれらによつて変化する  
誰が誰よりどうだとか

誰の仕事がどうしたとか  
そんなことを言つてゐるひまがあるか  
新たな詩人よ

雲から光から嵐から  
透明なエネルギーを得て  
人と地球によるべき形を暗示せよ

新しい時代のコペルニクスよ  
余りに重苦しい重力の法則から  
この銀河系を解き放て

衝動のやうにさへ行われる  
すべての農業労働を  
冷く透明な解析によつて

その藍いろの影といっしょに  
舞踏の範囲にまで高めよ  
新たな時代のマルクスよ

これらの盲目的な衝動から動く世界を  
素晴らしく美しい構成に変へよ  
新しい時代のダーヴエンよ

更に東洋風静観のキャレンジャーに載つて  
銀河系空間の外にも至り  
透明に深く正しい地史と

増訂された生物学をわれらに示せ

おほよそ統計に従はば

諸君のなかには少なくとも千人の天才がなければならぬ

素質ある諸君はただにこれらを刻み出すべきである

潮や風……

あらゆる自然の力を用ひ尽くして

諸君は新たな自然を形成するのに努めねばならぬ

ああ諸君はいま

この颯爽たる諸君の未来圏から吹いて来る

透明な風を感じないのか

この詩には賢治のその後が詰まっている。学校で思い通りの実習、実践的な教育を果たした賢治、しかしその後校長の転任によって窮屈な身となった賢治、はたまた社会主義的活動の疑いをかけられて羅須地人協会賢治の作った地元の団体で、音楽など、たくさんのことを 賢治がたのしんでいた場所の活動を中止したりした賢治。次第に軍国主義的な「紺色」の雰囲気になる世界で、それでも教え子に未来の「マルクス」や「ダーウィン」のような各分野の第一人者になり、古い物にとらわれず新しい風に吹かれて突き進んでいってほしい。自分と願いを照らし合わせた作品になっている。

そして賢治にも死が訪れる。彼は羅須地人協会の活動、またその後に働いた東北噴石工場の技師としての活動で、農民たち、作業民たちの相談に乗り、何とか困難な問題を解決しようとはんそうしたとき、彼は無理がたたったのか高熱が出てしまう。高熱を発症してからは寝た切りの生活が続く。彼の体力はどんどん弱っていく、ついにその日が来てしまう。ある日、賢治は農民の肥料の相談に熱心に答えていた。その問答が長く続いてしまったせいか、次の日にはひどい熱が出てしまった。死期を察した父親が賢治に「言い残したことはないか」というと、賢治は「私の死後、国訳法華経を二〇〇〇部印刷して私の知己朋友に送って頂きたい。そしてそのほんの終わりに二〇〇部印刷を施してほしい」と言い残し、父をうならせたという。この後、この過程は日蓮宗に改宗することとなる。しばらくして人がひいている間に、賢治のいる部屋から読経の声が聞こえ、家族が急いで彼の家に行ったところ、彼はこと切れていたという。終始弱いからだであったが、彼は~~その~~過ぎまで彼なりの人生を全うした。

## この曲について

宮沢賢治の信長貴富の組み合わせは六連期でもしたため、この曲は早いうちに候補に上がっていたものの、なかなか上位6位にランクインすることはなかった。しかし、音源をいただいて気づいたのだが、この曲は春と修羅とは全く別タイプの信長作品であり、とても面白いと感じたため今回選曲に入れた。

この曲は銀河鉄道の夜の話の本編を曲にしているのではなく、(というと語弊があるのだが)まとまるとってきいているのは宮沢賢治の他の詩集からで、本編から細かいごくを集積して散らすまさに「音画」というタイトルにふさわしい構成になっている。

ここで参考までに3秒でわかる銀河鉄道の夜を竹村的に要約してご紹介しておこう。主人公のジョバンニには心の中で通じあった友達カムパネルラがいた。しかしジョバンニはその貧乏さから他の友達には嫌われ、ネタにされていたので、カムパネルラも普段はいじめっ子の側に立ち、申し訳なさそうにジョバンニを見ているのであった。

そんな中、一年に一度の星のお祭りの日がやってくる。ジョバンニはお母さんのためにミルクを取りに行くのだが、そこでいじめっこの筆頭ザネリの率いる集団と鉢合わせしてしまう。そこにはカムパネルラの姿もあったのだった。悲しくなってしまったカムパネルラは丘に行く。すると気づけばジョバンニはカムパネルラと一緒に汽車に乗っていたのだった。そして不思議な旅が始まっている。彼らは知らない間にポケットに特別なチケットを手に入れており、電車に乗ることを許されていた。途中下にも書いたが、鳥を撮る不思議な男や、泣き崩れながら天上に消えるお姉さん、色々な不思議な人にあいながらも電車がつねに揺れる状態で物語は進行して行く。

しかし、最後、ジョバンニがいつまでも一緒だとカムパネルラにいったところで、彼の姿はなくなってしまう。絶望したカムパネルラは我に帰る。現実にもどったジョバンニは川で大騒ぎする大人たちの姿を発見する。カムパネルラがザネリを助けるために川に入って行方不明になったとのことだった。この話は彼の死を暗示させて幕を閉じる。彼らの旅した銀河鉄道はどこへ行く列車だったのだろうか。



## 譜面について

この曲は大変音が多く、譜面を見ると少し引いて見てしまう人が多いかもしれないが、よくよく見て見ると単純な音の重なりの上に成り立っており、なんなら同じ音で違うリズムの部分も多く、そこまで臆することはないと思われる。

この曲は信長先生のいわゆる「機能的、技法的作品」であると言える。ドップラー効果、隠されたメロディー（星めぐりの歌）、スライドする擬音。銀河鉄道の夜は終始鉄度が動く中で様々な人と共に展開される物語だが、その描写の多様さが本当に歯切れよく流れてくる。かなり力の入った秀作で、この曲が世に出ていないのは個人的には疑問である。

銀河鉄道の夜には途中で鳥を捕まえる男が出現したり、昇天を予感させる駅での別離など、たくさんの天の描写が成されていることにも魅力があるが、曲中での「ハルレヤ」に象徴されるように、この曲は本当に美しく情景を描写している。